

第6章 総合的・基礎的人間探究による 人間教育のための具体的提案

第1節 人間探究塾 = 人間を科学し各分野で活躍できる指導的人材の育成

『われわれの現代社会が健康でないと理解するには、大学者たることを必要としない。現代社会は数知れぬ病にかかり、発作を起こしている。病状が峠を越していると言っても、回復しているわけではない。どう見ても、ただ小康を得ているだけなのである。』

スイスの人格医学者である故ポール・トゥルニエ博士は、1947年の著書『調和なき世界の人間～現代社会と人格の病理』の中で、上記のように警告している。それから現在に至るまで、病める社会は放置され、病はますます深刻な事態に陥っている。

急速な文明の発展は、人間の生活を便利で快適なものにした。しかし、利便性を追求するあまりに、人が人として育ち生きることの困難な、非人間的な社会を創ってしまったのである。

現在では、「少年犯罪の低年齢化」「自殺」「いじめ」「虐待」「学級崩壊」「引きこもり」「子どもの心が見えない大人たち」「家庭における人間関係の崩壊」「人格崩壊」「キレル人間の急増」など、人間の心の領域で様々な問題がクローズアップされるようになった。科学技術に関する研究と現実化は急速に進展しているのに対して、人間の心に関する研究と実践は、科学技術の進歩に追いつくことができないでいる。

特に、人間とは何かを問う総合的な「人間の科学」は、進歩するどころか、成り立っていないとさえいえるのである。その典型的な例が「人間の科学特別委員会」である。

1989年、日本学術会議は第107回総会で「人間の科学特別委員会」を設置した。その趣意書で同会議は次のように宣言している。

『ヨーロッパの産業革命に端を発した科学技術の進歩は急速にその度を加え、かつて人類が予想もしなかった程度に物質文明を開化させたが、一方、それによって人類は、過去に見られなかった重大な危機に立たされている。科学技術の進歩は一面において物質偏重の価値観を強め、生命に対する技術介入に係る不安や、地球生態系の激しい変化を招き、社会経済環境にも様々な問題を醸し出している。

人間が創り、人間が発展させてきた科学は、本来、真理を追究し、人間の幸福に貢献すべきものであるにもかかわらず、人類の生活や自然・社会環境に混乱を招いている側面もあるのではないかとの矛盾も感ぜられ、ここに科学者の苦悩がある。我々は今や、科学の在り方を再考し、早急に人間と科学技術との不調和を克服する視点を明らかにしなければならない。

このためには、「人間とは何か」を問い直し、「人間存在の理法」ともいべき概念を改めて考え、そこに立脚して、科学技術と自然との調和を求め、人類進歩への展望を模索するところから始めなければならない。

人間の間人たる特質はその精神であることを思えば、人間を知性、感性の面から広く捉え、人間そのものについてのもっと深い知識と理解が強く望まれる。この立場から、人間を個体としてばかりでなく、生物学的並びに社会的集団として把握し、人間の総合理解に努める必要がある。

この特別委員会は、このように人間を学際的、総合的に把握し、人類の危機に対処することを目指すものである。

以上の観点に立って、人間の科学特別委員会の設置を提案する。』

この「人間の科学特別委員会」はとても重要な役割を担っている。今後なお急速に発展していく科学技術に人間の心がどこまで追いついていけるのか、はなはだ疑問である。社会の急速な変化に対して、人間の内面にある精神的な行方を考慮することを、我々は置き去りにしてきたのである。人間の心の行方についての「人間の科学」が必要不可欠な時代なのである。

ところが、「人間の科学特別委員会」は、設立後1年ももたずに消滅してしまったのである。後に日本学術会議の事務局長に直接面談して事情を聞いたところ、甚だ情けない現実が明らかになった。会議に参加する研究者たちは、それぞれ自分の専門分野について一方的に話をするだけで、異なる分野の研究にはほとんど耳を傾けず、互いに言い放しで議論が成り立たないというのである。

それぞれの専門分野に関しては意義深く詳細な研究がなされていても、研究があまりにも専門化し細分化しすぎているために、異分野間で相互に交流し議論し合い、総合的に人間を考察することができないのである。「人間の科学」が成り立たない精神環境をつくってきた大人の責任は重大である。

現代社会は、人間そのものに対する関心が薄れ、総合的に人間を探求する人間教育を失ってしまった。人間理解、自己理解を追い求めることが難しくなってしまったのである。乳幼児教育から基礎的な人間教育を実践しなければ、自分を失いバランスが取れない情緒不安定な人間が増えるだけである。心の病を発症する人が今後ますます増加していくのは必然的であろう。

21世紀には、新たな感覚による「総合的な人間の科学」が必要であり、その上で心の病の防止策としての「予防・健康医学的な環境を創造する実践者の養成」が不可欠である。「人間とは何か」を問う総合的な人間の科学を基本としない社会は、人間を置き去りにしてしまうことになる。早急に、総合的に人間を科学することのできる指導者の養成機関を創設する必要がある。

木村は、人間の心の行方の危機を感じ、1971年から、乳幼児期の子どもに大きな影響を与えている親の教育を視野に入れて、実践を始めた。牧師でもあったために、哲学・生理学・精神医学・人間教育学・犯罪学・社会学などを学んでおり、「人間とは何か」「乳幼児とはどのような存在か」「人間にとって生と死はどのような意味をもつのか」などを考察しつつ、人間教育に携わってきた。

乳幼児精神医学の世界では以前から、人間としてのスタートである乳幼児期の生育環境と親の精神衛生の重要性が指摘されていた。乳幼児期の親子のスキンシップ不足は情緒不安をもたらし、人間関係不全に陥る可能性が大きいこと、乳幼児期の生活環境の悪化と自然経験の少なさによって前頭連合野が発達せずに、思考能力や判断能力が欠如すること、などが指摘されてきた。様々な心の病の原因を考察していくと、乳幼児期の育てられ方に大きな問題がある場合が多いことも確認されている。

感性豊かな乳幼児は、大人の心の状態を全身で感じて育つ。乳幼児は、大人が自分たちを何もわからない存在として軽視しているか、尊い存在として見ているかを、大人の目を見て感じ、自分の人格の尊厳を認識する。大人が口や目で威圧をかけ、理想を押しつける教育やしつけでは、子どもの素直さが育たないだけでなく、人間の尊厳を学べないのである。陰湿ないじめや引きこもり等の心の病も、乳幼児期に人と親しく関われなかった生活教育環境の悪化がもたらす心の傷を物語っている。その心の傷の芽は乳幼児期に目に見えない形で育ち、少年期以後に現われ始めるのである。

総合的に人間を科学することの基本には、乳幼児期の総合的な生活教育環境と人格形成の論議が不可欠なのである。

人間として生まれて間もない乳幼児とその家族の心が健康に育つ、具体的な実践が必要な時代がきている。予防医学的・健康医学的な心の教育のための援助が、人間教育の原点である。精神神経科の医師以上に幅広く総合的に人間を科学し、健康な心と豊かな人間関係を創造する、夢の持てる人間の養成が、現代には必要不可欠なのである。

個々が豊かな感性を自ら育て、内在している人間の神秘と不思議に目を向ける深い洞察力をもって、自らの無限の可能性に夢を持ち人生を創造する人材を養成する機関が必要であると痛感し、『人間探究塾』の設立を提案する。

「人間とは何か」「夫婦とは」「家族とは」「家庭とは」「生と死の意味について」等の探究は、人間の生活・教育の基盤である。社会の指導的立場にある人には、これらのテーマを探求し続け、人を深く理解することが求められる。

人間はどのように自己形成をするのかは、生まれて間もない乳幼児と関わることによって、体験的に考察することができる。乳幼児期の子どもを持つ若い夫婦と親しく関わることで、夫婦・家庭・家族とは何かを身近に感じ、生きる意味の基盤を深く考察することができる。

人間が健康的な自己形成を成し遂げるためにも、健康医学的・予防医学的で総合的な「人間の科学」を推進する必要がある。研究者と実践者が多くの賛同者と共に歩んでこそ、「人間の科学」は実現し成立する。現代人の心の危機を感じる人が集まり、少しでも健康的な社会を創造できる21世紀を寄贈するために、行動を起こしたいと願う。

以下に『人間探究塾』の概要を記す。

* 「人間の科学」とは、人間に関わる全ての学問を総合的に考察することをいう。特に、乳幼児精神医学・発達心理学・脳生理学・動物行動学・青少年犯罪学・人間関係学・組織学・都市工学などが、人間を探究する上で示唆に富むであろう。「人間の科学」は、机上のみの理論であってはならない。人間の過去・現在・未来を総合的に考察し、常に具体的な実践を伴いつつ、人間の豊かな感性を養うことを目的とする。

* 探求テーマの例

- ・私の存在理由
- ・愛のメカニズム
- ・結婚の意味
- ・胎乳幼児期の発達と人格形成
- ・子どもの遊びと感情の発達
- ・家族関係と人間関係における人間形成
- ・乳幼児精神医学における母子相互作用と情緒の安定
- ・家族犯罪のメカニズム
- ・青少年犯罪の要因
- ・人間と自然との関係
- ・情操教育
- ・道徳教育

- ・生と死の教育
- ・性教育
- ・他

- * 各個人の探究テーマに添って自習自得。
 - * 各界の研究者・実践者を講師に招き講座を開催。
 - * 必要に応じて世界各地の実践研究を視察。
 - * 実習によって乳幼児と関わり、ホームステイなどにより家族と交流しつつ、人間の本質を探求。
 - * 共同生活を通じて人間理解・自己理解を深める。
 - * 自然の中での静思・静修体験。
 - * 各学会にて研究成果発表。
-
- * 研修年数・3年間・全寮制
 - * 定員20名
 - * 研修費・寮費として月7万円の育英資金貸付（卒業後7年返済）

第2節 6年制教員養成機関＝人間科学による「心のお医者さん」としての教員の養成

日本経済団体連合会は、2005年1月に「これからの教育の方向性に関する提言」を発表し、「家庭の教育力の向上」の項と「学校・家庭・社会の交流・連帯」の項で、次のように提言している。

『家庭の教育力が低下し、保護者自身が子どもをしつけるどころか、保育者としての自覚に欠ける行動をとるケースが増えている。基本的な生活習慣や、倫理観などを身につけさせるのは保護者の義務である。とくに就学前の乳幼児教育は重要である。現行の教育基本法では、家庭教育は社会教育の一部として奨励されるだけの位置づけになっている。

また、児童、生徒、学生や保護者は、教育サービスを受ける権利とともに責任も有し、学校と協力して教育をよくしていくという意識を高める必要がある。規律を厳守することなど、教育サービスを受ける側の責任を教育基本法に規定すべきである。』

『家庭でのしつけを補う上でも、地域社会の果たす役割が大きくなっている。社会生活に必要な基礎的しつけを保護者だけに任せるのではなく、時には保護者に代わり、子どもを誉め、叱り、慈しむ地域社会の役割に対する期待が高まっている。

また、地域社会において、地元の施設や職場を学校の教育活動に役立てるとともに、学校は「開かれた学校」を目指し、積極的に地域社会との交流と連携を図り、地域全体で教育力を高めていくことが求められる。

産業界も次世代を担う人材の育成に自ら取り組み、カリキュラム開発への協力、インターンシップ希望者の受け入れ、学校への講師派遣など、教育の充実に積極的に協力する。このように、教育力の向上に向けて、学校、家庭、社会が交流・連携することの重要性についても、教育基本法に規定する

必要がある。』

保護者としての自覚に欠ける親が増加しているのは事実である。しかし、親に自覚が欠けている状況は、親自身がそのように育てられてきたためであって、親を責めるだけでは問題は解決しない。欠けている部分を具体的に援助指導することになしには、事態は改善されない。

トモエでは、親たちが我が子だけではなく多くの乳幼児と親しくふれ合うことができる。母親たちは感受性豊かな乳幼児に刺激されて、本能的な母性をよみがえらせている。多くの親が参加していることから、親同士で互いに協力し合い、配慮し合う人間関係を築き、親が他者とのコミュニケーションを深めることができるように、環境を設定し指導している。

多くの親たちが、体験を通した生きた学びによって、子どもとの関係だけでなく夫婦間の関係も改善させている。

年長児家族には、卒園後どのように小学校との協力関係を築いていくか、という話を具体的にアドバイスする。特に母親たちには、積極的にPTAの役員を引き受けることを推奨している。子どもを学校や先生に預けて全面的にお任せするのではなく、互いに意見を交換し合い、連携して共に子どもを見守り育ていく協力関係を築くことができるように、卒園後もずっと指導を続けている。トモエでは、乳幼児期から子どもの教育を幼稚園に任せきりにしてしまうのではなく、親たちが主体的に園長やスタッフと協力しながら、生活教育環境を共に創造している体験が、親たちの意識を高めているのである。

親は子によって育てられ、親として成長させられるものである。最初から立派に育児ができる親などいない。地域社会の教育力が低下し、若い世代の親たちだけで子育てをしなければならないことが多い現代社会では、子どもの心を健康に育てることは、ますます困難になっている。地域社会性は今後も急速に失われていくと予想されるため、早急にこれを回復する手立てを講じなければ、親子の悲劇は絶えることがないであろう。

トモエでは園を常に開放しているため、両親をはじめとして乳幼児から祖父母まで多くの人々が集う。三十数年前から幼稚園で地域社会性を実現すべく、親同士が互いに支え合い励まし合う社会共同体的な生活環境を創造してきたのである。

文部科学省は「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」を開催し、2005年にその報告書を発表した。この報告書の中で、同会は次のように提言している。

『情動は、生まれてから5歳くらいまでにその原型が形成されると考えられるため、子どもの情動の育成のためには乳幼児教育が重要である。』

『子どもの対人関係能力や社会的適応能力の育成のためには適切な「愛着」形成が重要である。』

『子どもが安定した自己を形成するには、他者の存在が重要であり、そのためには特に保護者の役割が重要である。』

『子どものこころの成長のためには基本的生活のリズムの獲得や食育が重要である。』

トモエには、3歳から6歳の園児と共に、多くの母親や父親たち、0・1・2歳の弟妹たちも一緒に参加している。特に0歳から参加している乳幼児は、豊かな感性が確実に養われているのがわかる。

母親を核として多くの人と親しく関わり合うことのできる生活環境を創造しているため、トモエの子どもたちは我が母を中心に多くの人に愛され、抱かれ、じゃらけることで、たっぴりと愛着を体験している。親同士で協力し合い、多くの乳幼児を愛情をもって抱きしめながら、良好な親子関係を構築している。そのため、子どもたちは安定した自己を形成している。

また、多くの大人たちのあたたかな眼差しに見守られながら、子どもたちは自発的主体的に自分で考え、友達を作り、創意工夫して遊ぶ。自然の中に入り、動物的直感を用いて思いきり体を使って遊ぶ。体も頭も思いきり使って遊ぶことで、お腹がすくので、何でも食べるようになる。思いきり遊ぶことで体が疲れるので、10時間以上睡眠をとれる。新陳代謝もよくなり、心身の健康につながる。

家族からの愛情を受け、安定した情緒を育むために、0・1・2歳の弟妹を自由に連れてきて、多くの人と関わり合う生活を体験するように指導している。乳幼児教育は、子どもだけではなく家族全体に対する援助と指導が必須であると考え、親の教育を実践してきたのである。親が互いに支え合い助け合って、子どもたちの安定した情緒を育むことのできる社会共同体的な生活教育環境を創造してきたのがトモエである。

近年、青少年による凶悪犯罪が増え、引きこもり・摂食障害・うつ病などで苦しむ若者が増えている。それらは、乳幼児期からの育ちの過程で被った心の病の表れである。

乳幼児期には、母や父に抱かれ、あやされ、自己のあるがままを受け入れられ認められることで、子どもの情緒は安定していく。しかし、精神的に不安定な親たちが多く、親の育児不安は感性豊かな乳幼児に直接伝わってしまう。我が子を可愛いと思えない親、抱っこしたりあやしたりすることを拒否する親が急速に増えているのである。

家庭でも学校でも、子どもたちが素直に自己を表現することが許されない社会になりつつある。大人の指示に従うことばかりで、自分で感じたり考えたりする機会が少ない。そのため、自己を表現して自分自身を見つめ、自分の言動をコントロールする感覚を養うことができないでいる。自己の尊厳を感じ、他者の尊厳を感じて、互いに配慮し合う生活体験を十分に持つことがないまま、大人になってしまうのである。

家庭も学校も地域社会も、子どもたちの心を受け止め、健全な育ちを保証する機能を低下させている。子どもの心を受け止められずに苦悩している親と教師が、数多く存在するのである。

これらの問題は、科学技術による利便性ばかりを追い求めて、人間を総合的に探究することをおざなりにしてきたことに起因している。人間が人間として生きる上で最も重要な人間形成の基盤となるのが乳幼児であり、母親の存在である。しかし我々は、「女・子ども」という差別的な表現に見られるように、女性と乳幼児を軽視してきた。社会構成の基本である「個の存在」「夫婦」「家族」などについて、真摯に探究してきたとは言い難い。

乳幼児期の生活環境の重要性は久しく指摘され続けてきた。しかし、理想論は論じられても、具体的な実践はあまりにも少な過ぎるのが実情である。

地域社会に豊かな人間関係があった時代には、親も多くの人から刺激を受けて自己修正ができた。子どもの周囲にも、窮状を察して寄り添い支えてくれる人がいた。かつてはどこにでも当たり前にあった地域社会の教育力は、心の病を予防する機能を持っていたのである。

今こそ、心を健全に育む機能、心の病を予防する機能を社会に回復させなければならない。乳幼児の心が親子関係から育まれていくこと、親自身が自らを知り、心の傷を癒し、自分の過去を乗り越え

ていくという作業が必要になること、などを考えると、心の病の予防には、その舞台である家族を支えることが必要となる。子どもが乳幼児期のうちに援助の手をさしのべることができる人材が必要になる。専門家としての教育者の重要性がここにある。そして、学童期以降の子どもの教育にあたる者には、乳幼児期の子どもと親子関係の理解が必須となる。

教育者は、感性豊かな子どもたちの心の発達に重大な影響を与えるのであるから、身体の病を治療する医師以上に、深く人間を科学し理解する必要がある。心の病を発症した子どもたちに対応する以前に、子どもたちが心の病にならないように予防するのが、教育者の役割だといえよう。教育者が子どもと家族の「心のお医者さん」になることになしには、この現代社会の病状を回復させることはできないであろう。

予防医学者としての教育者は、人間を深く探究し、親子を支え援助するための知識と実践面での専門性を身につけなければならないのである。

以上の視点から、6年制の教員養成機関の設立を提言する。

現在の教員養成課程には、人間を理解するためのカリキュラムが欠けているといえる。発達心理学を学ぶことはあっても、6歳までの人間形成に重要な乳幼児精神医学・動物行動学・青少年犯罪学等を学ぶことはほとんどない。人間とは何か、子どもとはどのような存在なのか、家族とは、愛や信頼とは、生と死とは、などの哲学的宗教的な問いを考察し続けることなしには、教育は成り立たない。現状では、6歳までの人間の発達について教師がほとんど知らない状態で、乳幼児教育や小学校教育がなされているのである。

人間教育の基礎としての乳幼児とその親を支えるに十分な資質を養うためには、大学の医学部を卒業するに匹敵した学びが必要となる。様々な分野の学問も、理論的な研究だけでは生きた学びとはならない。実際に子どもや親たちと関わり合う体験が、意義ある学びとなる。現代の複雑化した親子関係の現状を鑑みると、最低でも半年以上の実習が必要となろう。

人間教育の基盤である乳幼児とその親を支え援助できる「心のお医者さん」としての教育者には、深い人間理解と豊かな人間関係を築く能力が、医師以上に要求される。そのため、少なくとも6年間の学びと実習の期間が必要になる。

6年制の教員養成機関では、人間を科学するためのポイントを体験的に学ぶことができるように、カリキュラムを組む必要がある。人間は不思議で神秘的な存在であり、わからないことが無数にある。人間を探究する上では、6年間の学びでも充分とはいえない。教育者は、その全存在が子どもたちに大きな影響を与えるのであるから、生涯に渡って人間を探究し続けなければならないのである。

< 参考資料 >

* コラム・木村仁「これからの保育者に伝えたいこと」『保育者論』（北大路書房）より

『乳幼児は、言葉ではなく心の奥を見ている。

乳幼児教育者は人間教育の基礎的存在である。

私が入人間のなかで一番おそれているのは乳幼児です。

乳幼児期は、言葉が発達していないゆえに、直観力が人間の一生の中で一番冴えているときです。

あの澄んだ目でジーと見つめられると、どこに目をやったらいいのかわからずかしく感じます。私は、園長に就任して三十数年間乳幼児と毎日関わっていますが、大人以上に心を見る純真な存在であることを日々知らされてきています。彼らは、大人のひとつひとつの心のあたたかさを栄養源として生きて、情緒を安定させている存在です。そのため、教育者の中で最も重要な人間教育の基礎的位置にあると自覚し実践しています。

乳幼児理解は人間理解の基礎であるため、乳幼児精神医学を学ぶ必要が生じます。

人間理解が人間教育のスタートです。そのスタートとなるのは、胎乳幼児期です。胎乳幼児は母体が核であるため、母子一体で考察する必要を感じたのです。乳幼児精神医学を学ぶことで、「母子相互作用」という世界の存在を知りました。お互いに影響し合って成長していく関わりのことです。男である私には、理解するのに時間がかかりました。しかし、世界で初めて幼稚園を創ったドイツのフリードリッヒ・フレーベルは、160年前に幼児教育は母親の教育にあると力説しました。私自身は、30年前から母子一体の教育をし、現在は、家族がいつでも参加できる教育を実践しています。

母子関係の影響は、永遠に続く。乳幼児教育者の責任は重大です。

乳幼児理解のために脳生理学を学んで、生活環境の影響の大きさを知り、乳幼児教育者の責任の重大さに身の引き締まるのを感じました。母親を取り巻く精神的な環境等により、乳幼児は大人のひとつひとつの呼吸している生き方を脳に感じ、気質など個性をつくっていくのですから、乳幼児教育者がつくり出す環境が最も大切なのです。動物行動学、人間関係学、犯罪学、精神医学などを学ぶ必要を感じ、学び続けています。すべてと言っていいほど、人間の教育の基礎は乳幼児期の生活・教育環境にあるのです。乳幼児と親そして大人の間接教育を総合的に考慮した人間探求をしなければならない時代が来ています。そのため、乳幼児の人格を最も尊厳する大人の教育が不可欠なのです。まず私たちから...』

第3節 清流のある自然体験公園 = 自然と人と親しく戯れ人間性を取り戻す町づくり

人間が人間の本性を発揮して生きる上では、たくさんの人との親しい人間関係、および自然と心地よく戯れる体験が欠かせない。しかしながら、高度経済成長期以降、子どもの遊び場であった野原・小川・池などの自然環境がなくなってしまった。都市化の進行で身近に自然環境が失われ、日常的に自然とふれ合い人とふれ合う生活環境がなくなってしまったのである。

自然は人間の感覚に多くの刺激を与え、人間の豊かな感性を養ってくれる。人工的なカリキュラムや教材では教えることのできない動物的な直感や本能を、人間の内部に育ててくれるのである。人間として最も感覚の鋭い乳幼児期から自然に触れて遊ぶことによって、感受性が豊かに育まれ、状況判断能力や場面適応能力なども養われる。まさに「自然に勝る教師なし」なのである。

しかし、現代の子どもたちには、思いきり自然と戯れ、自然から学び、感覚や感性を養う場がほとんど与えられていないのが実情である。

子どもたちの遊び場、遊び時間の減少、それに伴う友達関係の希薄化など、子どもの生活環境と形態の変化は、心身の発達に大きな悪影響を及ぼしている。自然から切り離された子どもたちは、息の詰まるような生活教育環境の中で知性だけをふくらませ、バーチャルな世界に遊び、人間にとって最

も根源的な身体感覚を養うことができないでいる。

町から自然環境が消えていくにつれて、子どもたちの朗らかな歓声と笑顔も消えていきつつある。これらは、凶悪犯罪や心の病の発症が低年齢化していることの要因のひとつであり、声にならない子どもたちの心の叫びが聞こえてくる。

この数十年の間、人間は開発という名のもとに自然を破壊し、その代替として多くの公園を造成してきた。しかし、観察中心の公園や高齢者向けのパークゴルフ場などは多く造られたが、子どもたちが緑と土と水にまみれて遊ぶことができる体験公園は、わずかな数である。年配の人は子ども時代に泥まみれになって遊ぶ心地良さを味わっている。その心地良さを生む環境を子どもから奪ったのは我々大人たちで、その責任は重大である。

トモエでは、教室の中での教師指導型の教育には限界があることを知らされ、自然に頼ることの必要性を感じ、実践の中核に据えてきた。自然の中では、子どもたちは自らの自発性を存分に発揮してのびのびと活動する。子どもたちが自然の中で見せる輝きは、自然の持つ美しさや不思議と神秘への共鳴である。大人自身も、自然に触れることで心身がリフレッシュされ、生命の存在について思索をめぐらせることができる。親も一緒に遊ぶことで子どもも安心し、親自身も我が子と一緒に遊ぶ他の子どもと親たちから学ぶことが多い。親は子ども本来の姿を見出し、人間とは何かを学んでいるのである。自然の中で、親子は互いの人間性を確認し合い、人と自然に対する尊厳を感じ取っているのである。

トモエの親子が自然の中でどのように過ごしているか、ぜひ見に来てほしい。

この数十年間に、子どもたちは自然とふれ合う場を失っただけではなく、人と親しく関わり合う多様な人間関係も失いつつある。かつては賑っていた街角から、子どもたちの姿が見られなくなっているのである。

町にはあちこちに空き地があり、そこには常に子どもたちの姿があった。大きな子から小さな子まで、様々な年齢の子ども集団が、外で群れて遊んでいた。子どもたちは周囲の大人たちに見守られながら、多くの人と関わり合い、多くの活動を通じて、社会的なルールや生きる知恵などを身につけることができた。しかし現在では、子どもたちは屋外で群れることなく、各々の家の中で孤立している。子ども同士で、あるいは大人たちと親しく関わり合い、深い心の交流を持つことができないのである。

少子化が大きな社会問題として指摘され、政府は「エンゼルプラン」など様々な対策を講じているが、出生率は依然として低下傾向にある。少子化に関しては多くの問題点が指摘されているが、最も重大な点は、町から子どもの姿が消えていくことで、社会から豊かな人間性が失われていくという点であると考えられる。

地域社会の崩壊が進んだことによって、家庭も地域社会も子育て機能が低下し、人間の成長にとって最も大事な親子関係も充実させることが難しくなっている。子育てには苦勞が絶えない。しかし、互いに配慮し合い助け合う人間関係の中では、子育ては、親にとっても周囲の人々にとっても、楽しさと幸福感を多く感じることでできる営みである。乳幼児期の子育ての苦勞と責任を、母親ひとりに背負わせてはならない。子どもは社会全体の財産であり、皆で協力し合って育て合うべきものである。親だけでなく周囲の多くの人が協力し合って、地域全体で子どもを育て合う環境を回復させなければならないのである。

近年、子どもたちが自らの責任で思う存分遊べる「プレイパーク」や、学校の周りに木々を植え、

川をひき、小規模ながら自然と触れ合える「ピオトープ」を作る試みも広がりを見せている。設計段階から地域内の各家族間の交流と子育て環境を意識した「コーポラティブハウス」の意義も認められ、広がりつつある。

脳科学者・養老孟司氏とアニメ作家・宮崎駿氏は『虫眼とア二眼』（徳間書店）の中で、子どもの健全な発達と地域社会という視点から、次のような町づくりを提案している。

『生活のあり方を変えないと、この文明は亡びるぞ。家をかえよう。町をかえよう。子供達に空間と時間を！』

『まず、町のいちばんいい所に、子供達のための保育園（幼稚園もかねる）を！子供達が夢中で遊べる所。地域の子供なら誰でも入れる所。いつの間にか、すべての感覚を使って身体を動かしてしまう所。コンクリート、プラスチックをかくし、木や土、水と火、いきものと触れる所。子供達が家へ帰りたがらない保育園をつくる。大人が手と口を出さなければ、子供達はすぐ元気になる。先生達の考え方が鍵だし、親の考え方を变えるのも大切。その裏づけになる空間が要るのだ。』

『町には中心になる空き地がいります。盆踊りだの青空マーケットといった目的だけでなく、なんとなくあいてる空き地が、おヘソとして必要なんです。一軒一軒はしっかりと工夫します。それに、60年はもつように建てること。おとなりと近すぎず遠すぎない空間の確保がカギです。』

『これは夢ではありません。ぼくらの心のふるさとがどこにあるのかを考えれば、実現する力も意味も、この国の人々は持っていると思います。』

トモエは常時園を開放し、家族が自由に参加できる環境を創造してきた。乳幼児からお年寄りまで、様々な世代の人が毎日集う。子どもも大人も自発的に活動し、素直に自己を表現している。親しい人間関係を結び、信頼し合う関係を育てている。昔の長屋の生活のように、互いに支え合い助け合って生活することのできる、社会共同体的な生活教育環境となりつつある。

地域社会の人間性と教育力を回復し、親子関係をはじめとした豊かな人間関係を深めるためにも、全国各地に乳幼児期から親子で遊ぶことのできる自然公園を造ることを提案したい。

子どもたちは誰からも強制されることなく思いきり発散し、のびのびと夢中になって活動でき、親も一緒に遊ぶことで童心を取り戻し、無心に遊ぶ子どもたちから本当の子どもらしさを学び、人間性を刺激される、そんな公園である。

子ども時代の充実感と満足感が世代間で伝達されていくことで、親がリラックスして子育てを楽しむことのできる精神環境、社会全体で子どもを育てていこうとする精神環境を形成していくことができるであろう。

以下に、自然体験公園の一例を示して、具体的提案とする。

- * 森や林の中に清流がある、少し規模の大きい公園。
- * 木々や芝地の間に蛇行した比較的浅瀬の川を作る。
- * 川には岩・玉石・砂利・砂・土・粘土と、地質に変化を持たせる。
- * それらの地質に適応しやすいメダカ・フナ・ドジョウ・カジカなどを繁殖させ、生き物との触れ合いの場とする。
- * 中州や川縁に木を植え、川面に緑が美しく映えるようにする。

- * 砂利の川底を浅くし、キラキラと輝き波打つ川面をつくる。
- * 泥んこ遊びのための、粘土質のヌルヌルした感触を楽しめる池をつくる。
- * 川の長さは、自然の大きさを感じるためにも1000メートルは必要。
- * 水量調整ができる施設も必要。
- * 川の中に水の流れる滑り台、飛び石の道、丸太の一本橋など、幼児も楽しめる遊具をつくる。
- * 花畑・雑草の茂み・原っぱ・林の中にぽっかりと空いた空間などもつくる。
- * 乳幼児とその親が遊びやすいように、蚊やブヨが近寄ってこない植物を植える。
- * 自然体験公園は自治体ごとにあって、各々工夫を凝らした特色あるものにした方がよい。休日を利用して親子で近隣の町の公園へ出かけることも考えられ、地域間交流は互いの自治体にとっての良い環境創りにプラスに働く。
- * 新聞広告やホームページで紹介し、宿泊施設とタイアップした列車の旅を企画するといったことも可能になる。
- * アイディア次第で利用価値はいかようにも広がっていく。

乳幼児期は、親子関係にとっての蜜月である。子どもは親との信頼関係を基盤にして人格の基礎を築く。親は子どもから人間の尊厳を感じ取り、以後の家族関係や人間関係全般に大きな影響を持つ。子どもにとっても親にとっても大切なこの時期、自然の力を借りることで、人間の感性と可能性を最大限に引き出すことができるのである。乳幼児とその親たちが共に楽しむことのできる自然体験公園は、人間性あふれる社会を回復させることに寄与するであろう。

地域のあちこちに、子どもたちの笑い声が響き、大人たちの優しい眼差しが子どもたちの成長を見守っている、そんな環境を実現したいと、切に願う。

第4節 子育て支援策の拡充 = 乳幼児を最重要視し人間の尊厳を回復する働き方の変革

高度経済成長とバブル期を経て、我が国の社会は急激に変化した。中でも最も深刻な問題は、社会活動全般において「人間」の視点が欠落しつつあることである。

拝金主義的な企業姿勢は、安全性を軽視した商品の製造と販売を助長して、消費者をないがしろにしている。公官庁でも、自らの利得に目を奪われ、社会の公僕としての立場を忘れてしまっている例が多発している。

官庁や企業のモラルが著しく低下していることの第一の要因は、人間についての根本的な探究がなされていないことにある。

長時間の過酷な労働による過労死や中高年層の自殺、ニートの急増など、我が国の経済活動には大きな歪みが顕在化している。人間が人間として生きることの困難な社会にあって、そのしわ寄せは常に最も弱い部分に集中する。特に女性と子どもを覆う閉塞感は、我が国の将来の在り方を左右する、重大な問題である。

乳幼児期の子どもの情緒安定には、主として母親が子どもの側において、あたたかく見守り育てることが必要である。しかし、専業主婦の女性は、毎日がほとんど見返りのない家事育児の連続で、自分の

時間を持つ余裕もない。夫は残業や休日出勤などで不在がちである上に、女性が職場に復帰することは難しい場合が多い。自分だけが社会に取り残されているという感覚を持つ女性は多数おり、苦悩している。地域が機能していない現代社会の中では、母と子が家の中で二人きりになりがちである。「母子カプセル化」の悪循環が進行するのは、当然の流れであろう。

一方、働く女性も疲弊している。産科婦人科学会が2005年に行った調査によると、働いている女性の6割以上が女性特有の体調不良を訴えており、さらに過半数がこれを相談しづらいと感じている。

子どもをもつ女性が正規職員として長時間拘束されると、子どもたちは長時間に渡って親から離され、保育園などに預けられなければならない。職場復帰とその後のキャリアなどを考慮すると、産休や育児休暇を削らざるをえない場合も多い。

人格形成の基盤である乳幼児期の生活環境を最も重視し、家庭環境を充実させるために、抜本的な改革が必要なのである。

各企業においては、子育て支援事業を展開している例がいくつもある。

- * 育児休業制度の整備（育児休業取得率の向上・対象となる子の年齢引き上げ・休業者への情報提供や教育訓練の実施・有期雇用者や嘱託社員への適用・など）
- * 勤務時間の短縮（短時間勤務制度・所定外労働の免除・始終業時刻の繰上げ繰下げ・フレックスタイム制度・ノー残業デイ・など）
- * 在宅勤務制度
- * 事業所内託児施設の整備（保育園利用者の時差出勤・保育料無料化・延長保育・など）
- * 次世代育成一時金制度（子育て支援金の支給・出産祝金・保育料やベビーシッター利用料への援助・カフェテリアプランの導入・など）
- * 出産・育児で退職した人の再雇用制度
- * 勤務地を限定ないし指定できる制度
- * 産休や育児休暇中の給与手当での部分支給制度
- * ファミリーフレンドリー休暇制度（本人を含む家族の療養看護、子どもの学校行事への参加、ボランティア活動などを目的とした休暇取得）

これらの子育て支援策に加えて、乳幼児の情緒安定と親子関係の構築を最重要視する視点から、さらに以下の政策を実施することを提案する。

（１）6歳までの乳幼児をもつ親の残業禁止の法制化。

乳幼児期は、母親を核として父親や周囲の人々と多く関わり合い、情緒を安定させ、人格を形成していく時期である。この時期には、親が側に寄り添い、育てることが必要である。母も父も共に、法定労働時間内に仕事を終えて帰宅し、子どもと過ごす時間を最大限に確保して、親密で良好な親子関係を構築できるように、社会全体で援助すべきである。

（２）親が職場に乳幼児を同伴し、仕事をしながら子育てができる環境の創造。

企業が失いつつあるモラルと人間性を回復するためには、人間として最も純粹で素直な乳幼児の視点を導入することが有効である。企業も公官庁も教育機関も、人間の匂いを感じ人間を育てる組織であることが重要である。

乳幼児を同伴して、大人が乳幼児とふれ合うことが多くなることによって、互いに人を育てる意識が高まる社会の創造につながる。社会の核としての家庭を重視した生活環境の創造になるのである。

(3) 職場に乳児施設を設け、乳児と母親が2時間おきに関わることができる環境の創造。

0・1・2歳の乳児が長時間母親と離れていることは、その後の親子関係と子どもの精神的発達に大きな影響を及ぼす。この時期は、母親は産休を取って、ゆっくりと親子関係を築くことが望ましいが、やむを得ず母親が働く場合には、常に母子に関わることの可能な労働環境であることが必要である。事業所内に乳児施設を併設して、2時間おきに親子が関わり合うことができるように援助すべきである。

3歳以上の幼児の場合も、職場から可能なかぎり近い場所に、保育園や幼稚園を確保することが重要である。各自治体は、乳幼児を持つ親たちが安心して働けるように、また、子どもたちが情緒を安定させて日々を過ごせるように、幼稚園や保育園を整備すべきである。自然林や水辺を造り、乳幼児が自然と関わることのできる環境であることが望ましい。

(4) 乳幼児を持つ親は、職場に歩いて通える距離に住居を構える最優先権を持つ。

安定した親子関係の形成を、通勤のための時間によって奪われないようにすることが必要である。

人間形成の基盤である乳幼児期は、親だけに育児の重責を背負わせてはならない。乳幼児を社会全体で見守り、すべての大人の責任のもとで育てる生活教育環境を創造しなければならない。上記の提案を、数十年かけても少しずつ実現させていくことを願う。

この報告書に記した提案は概略のみで、記述は不十分である。後日あらためて詳細を提言したいと考えている。

<参考資料>

* 『子どもを伸ばすお母さんのふしぎな力』 渡辺久子(企画室)より

『幼ければ幼いほど、子どもとしっかり関ることが必要です。時間が短い分、うんと濃密に子どもとベタベタしてください。夜のひととき、そして休みの一日、しっかり関わってからだでの甘えを受け入れ、子どもの心のよりどころになり切ることです。』

家では仕事のことは全部忘れ、子どもとゆったり抱き合うのです。そうすると、子どもの心に安心、信頼、喜びといった大事なものが育っていきますし、お母さん自身も、自然にリラックスできます。

働きながらの子育てというのは、どうしても十分にはいきません。子どもとしっかり関わろうとすれば、その分仕事に回せる力は少なくなります。それを、今は仕方ないと割り切ることも大事です。

子どもとしっかり関わっていれば、子育てはしだいに楽になるものです。それが家事や仕事とは違うところですよ。

子どもを持って働く場合、まわりの人たちに支えてもらうことも、時には必要です。自分が仕事を

している間、子どもと接している先生や近所の人たちに、子どものことを何でも教えてもらえる信頼関係を持ちたいものです。

私の場合は、自分のほうから近所の方に近づいて仲良くなり、子どもがいつもお世話になっていることの感謝の気持ちをこめて、昼間空いている自宅を子供文庫に開放して、利用してもらったりしました。

働きながらの子育ては、どうしても無理な部分、足りない部分が出てきます。そこは謙虚にまわりの人たちに助けを求め、助けられたら感謝するという姿勢も大切です。』